

## IATSSフォーラム事業とその現況

重田隆康\*

IATSSフォーラムは、その事業を開始以来4年を経て、既に200名余の修了生を送り出している。本稿ではIATSSフォーラム設立の背景と目的、組織運営、参加者の選定システムと構成、研修プログラムの内容を説明する。またユニークなこの事業に準備段階から携わり、以後、東南アジア各国からの参加者と日頃接してきたこれまでの経験を顧みて、IATSSフォーラムの原点である「共に考え共に学ぶ」を実践してきた成果について述べる。

### IATSS Forum Activities and its Current Situation

Takayasu SHIGETA\*

IATSS Forum, since its establishment in 1985, has already sent out more than 200 participants who successfully completed the program. This paper explores the background and aims of its establishment, including organizational profile, and selection system for its participants. The author's experiences through having been involved with the unique activities of IATSS Forum since the preparatory stage, and with the participants from the Southeast Asian countries as well, are reviewed from the principal concept of IATSS Forum "Think together, Learn together."

#### 1. はじめに

遙か彼方に、伊勢湾の広がりが見える小高い丘の上、海の反対側には、西行法師も和歌に歌った美しい鈴鹿山脈の山並みがうねっている。

その丘の上の緑に囲まれたしょうしゃな建物の中のホールでは、若者達が熱心に講義を聞いている。熱心な質問、討議も繰り返されている。講義が終わると、ある人は『万葉の森』を散策している。ある人は図書館で熱心に本を読んでいる。また、ある人はピンポンを楽しんでいる。近在の日本人の訪問者と楽しく打ち興じているものもある。全て東南アジアからの人達である。半数ぐらゐは女性のような……。

これが三重県鈴鹿市にあるIATSSフォーラムの或る一日の点描である。

IATSSフォーラムは昭和60年9月からその事業

\*IATSS フォーラム鈴鹿所長  
Secretary General, IATSS Forum  
原稿受理 1989年6月19日

を始めた、(財)国際交通安全学会の一事業である。既に開設以来約4年が経過している。

このIATSSフォーラムとはどんな試みなのだろうか？ どのような考えのもとで運営されているのか？ それをこれから説明したい。

#### 2. 目指すところとその理念

現在世界中の、いわゆる開発途上国、中進国から多くの研修生が日本に留学に来ており、その総数は2万人をはるかに越えていると言われている。多くは日本の海外に進出した企業での技術教育、また大学での学術・教育研究である。これらの留学生が現在そして将来、祖国の発展に貢献するであろうことはまず間違いない。

しかし、同時に余にも多くの深刻な問題が、未解決のまま進行していることも事実である。

いくつかの例を挙げるなら、適正技術の問題——日本で学んだ高度な技術が、技術的基盤の大きなギャップから、そのまま祖国では生かされない。日本語の問題——過大な時間と費用を費やして学んだ日

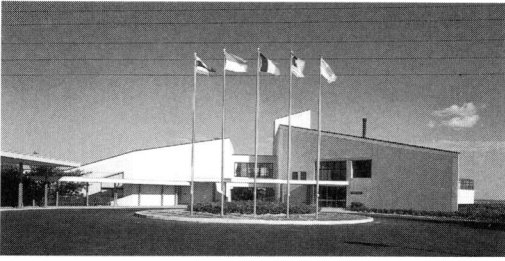


Fig. 1 IATSSフォーラム鈴鹿センター全景

本語が、国では役に立たない。そのため日本で学んだことを更に帰国後に展開するための情報のパイプが途切れてしまう。

それ以外にも多くの問題が介在しているが、最も深刻な問題としては、限られた非連続的な形での知識・技能の修得という問題がある。それが技術であれ、社会の制度、学術であれ、全てが長い時間的経過を経て形成されたものであり、更に個々の専門領域を越えて、お互い到他領域と深い相互関連のもとに発展したものであることはいままでもない。

日本で学んだ技術が故国へ帰って生かせないということも、実はより広い包括的な文脈の中での専門知識・技能という形式で学習がされず、孤立した知識・技能でしか学習されないからである。

現在日本に来ている海外の研修生がそのような配慮のもとに教育されているであろうか？ はっきり否といわざるを得ない。それが農業であれ、工業技術、教育システムであれ、歴史的時間の経過に目を向けず、他領域との相互関連を忘れ、隔絶した専門知識技能を習得したとしても、その効果はゼロと言わないまでも、極めて希薄なものにならざるを得ないであろう。

更に重要なこととしては、それら現代日本の諸様相をはぐくみ育てた、文化的基盤について理解してもらうことが必要である。同じ思考方式を共有する同じ文化圏なら必要ないかもしれない。しかし、日本はその歴史的、地理的な要因から、西欧諸国のみならず、その他の諸国からもその文化が大幅に異なっている。この様な異文化圏での学習には、同文化圏内でのそれ以上に、その解釈に時間と労力を要するのである。また、A文化圏で成立することはB文化圏では成り立たない事すらある。

我々日本人はどれもこの事実を忘れがちである。

以上のような基本的な問題に加え、日本人の犯している重大な過ちがある。それはこれら異文化圏から来る研修生から日本人も学ばなければいけない、

ということをしつかり忘れていているということであろう。

日本という歴史的、地理的にも孤絶した独自の環境の中で独自の文化を形成し、異文化との交わりを回避して育った日本人は20世紀の現在でも、驚くほど外の世界に対する対応を知らず、それが現在世界のいたるところで摩擦を生じている。そしてその摩擦は益々深刻な様相を示しつつある。異文化圏で育ち、現在日本に来ている多くの研修生こそ、我々が彼らの物の考え方、宗教、社会、価値観、そして更に彼らと、お互いの尊厳を維持しながら平和に共存していく術を学ぶ、絶好のチャンスではなかろうか？ 学ぶのは彼らだけでなく我々日本人も、なのである。

現実はどうだろうか？ 全く悲観的といわざるを得ない。彼らの多くは日本という異文化社会で隠れるようにして生活しているのである。

以上のような現状にかんがみて、次のようなIATSSフォーラムの理念とその運営方針が設定されていった。

① IATSSフォーラムの研修生（参加者と呼ばれる。以下参加者）は特定の専門領域を学ぶよりはむしろ、日本の近代化の過程を、教育、技術、農業、文化、外交政策等多角的に学び、それらがお互いに有機的な相互影響を与えながらどのように現代日本と日本人を形成していったかを研究し、その中から各参加者国のこれからの国造りに役立つ鍵を模索する。その意味からIATSSフォーラムのプログラムは、包括的なものであり、限定的なものであってはならない。

更に重要なことは日本と日本人を学ぶことが終局目的ではなく、それはあくまで比較研究のための事例として提供されるものである。自国を知り、参加者国の発展を計ることがその究極の目標である。

② 一国の発展を担うものは、例えば、政府官僚といった特定の分野の人材だけではなく、その社会の全ての分野の人材が参加すべきものであり、更にそれらの違った分野のパワーの結束と相互協力によってのみ達成されるものである。従ってIATSSフォーラムの参加者は、彼らの社会の、ひいては世界の発展に貢献し得る実践力のみならず、その考えを社会に伝播し得る指導力さえあれば、その出身分野を選んではならない。

③ IATSSフォーラムは、同時に我々日本人が異文化圏から来た参加者から彼らの文化、宗教、価値観、

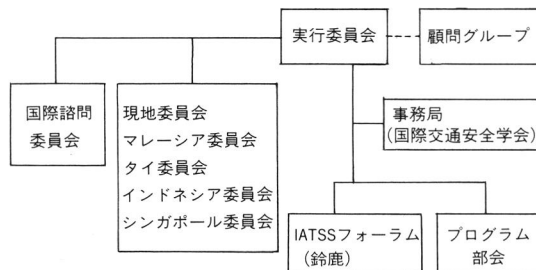


Fig. 2 IATSSフォーラム組織図

ものの考え方を認識し、学ぶ場でもある。このことは上記のIATSSフォーラムの理念とは背反するどころか、相互相乗効果をもたらす。従って、IATSSフォーラムと参加者との関係は、教えるものと教えられるものとの関係ではなく、両者とも、時には教える立場になり、時には教えられる立場になる。更に双方が共に学ぶ関係でもある。

④ 日本のそして日本人の近代化の過程として、過去を振り返ることは重要なことである。何故ならそれは、現代日本で何が起きているか、現代日本人は今何を考えているかを解釈する重要な鍵になるからである。しかしながら、従来のこの種の教育の欠点としては、常に過去に注目し過ぎるきらいがあった。書物等による教育には多分にその傾向がある。現在を、将来を練るためには、現在を考えることこそ最も重要なことである。現在の日本、日本人は10年前のそれとは違っている。時代は激変している。IATSSフォーラムは現在にスポットを当てたものでなくてはならない。それには既存の教材よりは、参加者が実体験し、自ら観察し、自ら結論を下す場なくてはならない。

### 3. 組織と運営

IATSSフォーラムの組織はFig. 2のように構成されている。

#### IATSSフォーラム実行委員会

国際交通安全学会の主要メンバー、有識者によって構成される。

全体将来計画の策定や実施計画の策定と実施、関係官庁との折衝業務を行い、IATSSフォーラムの組織全体を統括する。

現在は岡村總吾国際交通安全学会副会長 (IATSSフォーラム塾長、東京大学名誉教授)が実行委員長を兼任、副委員長は森田孝国際交通安全学会顧問 (大阪大学人間科学部教授)である。

#### IATSSフォーラム顧問グループ



Fig. 3 国際諮問委員会風景

実行委員長によって委嘱された学識経験者及び関係諸官庁、諸団体など各界の人々から構成、IATSSフォーラムの講師を兼ねる顧問もいる。

#### IATSSフォーラム現地委員会

東南アジア各国に設置され、その国における各界の有識者によって構成されている。IATSSフォーラム参加者の選考、参加者へのオリエンテーション、現地広報活動など、IATSSフォーラム事業の現地機能として活動を担当している。

現時点での各委員会の委員長をここに記す。

マレーシア：ウンクー・A・アジズ

(マラヤ大学教授、前同大学副学長)

タイ：サンガ・サバシリ

(科学技術エネルギー省常任次官)

インドネシア：サイディマン・S

(科学技術開発大臣顧問、

元駐日インドネシア大使)

シンガポール：アンドリュウ G. K. チュー

(人事院総裁)

#### IATSSフォーラムプログラム専門委員会

各分野の専門家によって構成され、実行委員会の策定実施計画に沿って、各国のニーズに対応したプログラムを作成する。通常2ヶ月毎に開かれる。

現時点での委員長は太田勝敏国際交通安全学会会員 (東京大学工学部助教授)である。

#### IATSSフォーラム国際諮問委員会

東南アジア各国に設置された各現地委員会の委員長とIATSSフォーラム実行委員会のメンバーで構成されている。IATSSフォーラムの今後の展開についてグローバルな視点から検討が加えられる。

通常2年毎に会合が持たれ、第1回は日本で、第2回はシンガポールで開催された (Fig. 3)。

#### IATSSフォーラム講師会 (仮称)

この講師会 (仮称) は、鈴鹿にあるIATSSフォー

ラムで実際に、講義、研究指導を通じて参加者に接触する講師が一堂に会して、IATSSフォーラム事業の全てについて意見を述べ合う会である。国際交通安全学会会員である講師を除いては、通常個人的に接触の機会の少ない講師も加わり、IATSSフォーラムの展開を考える会である。この会での意見提案は実行委員会に提出され検討される。1989年度より開始予定。(編集部注：1989年7月22日に第1回が開催された。)

#### 4. 参加者とその選抜・構成

IATSSフォーラムは昭和60年9月に開講して以来、既に11グループを鈴鹿に招聘し、現在(平成元年7月)第12回IATSSフォーラム参加者が鈴鹿に滞在中である。東南アジア4ヶ国、インドネシア、タイ、マレーシア、シンガポールから既に招聘されており、来年度からはそれにフィリピンが加わる予定である。

##### 応募資格要件

将来その国の指導者になり得る人材。出身分野、性別、教育レベルを問わず、年齢は25才から35才。英語に堪能なること。

年齢制限については、各参加者国の国情を考えて柔軟に対応している。今までの最若年者は23才、最年長者は39才であった。教育レベルについては、他の資格要件から、ほぼ全員大学卒業若しくは同等の教育機関の卒業生であり、欧米その他の大学院等卒業生も多数いる。過去に博士号取得者も約20名いた。

##### 選抜方法その他

書類選考、論文選考、現地面接からなる。書類選考は職場の上司の承認書、2名の推薦状及び応募書類からなる。書類選考及び論文審査の前半は現地委員会によって、後半は日本側選考委員によって実施される。最後の面接試験は現地委員会委員と日本側選考委員の合同で、参加者国の首都で実施される。

応募数及び競争率は各国によって異なるが、タイの場合のように50倍に達するようなケースもあり、各国共、年を経るに従い、競争率は高くなる傾向にある。

選考の基本方針としては、従来の日本での奨学金制度、研修制度がその選考において、多分に当事国や第三者任せで、必ずしもふさわしい者が選ばれなかったり、政府関係者に片寄ったりして、貴重な原資が活かされていない例が多く見られた。IATSSフォーラムでは、選考にあたって、必要なマンパワー、

費用、時間をかけ、その国の社会、ひいては世界の発展に貢献し得る実践力と指導力のある優秀な人材を厳正公平に選抜している。これもIATSSフォーラムの特徴と言えよう。

過去にある国から、参加者の選抜を政府機関に任せてほしいとの要望が寄せられたが、断った例がある。

これまでの国別の参加者数はTable 1のとおりである。

タイ国からの参加者は毎回女性の数が過半数を占めているのが特徴である。

将来ブルネイが加わることは充分あり得る。シンガポール参加者が少ないのは、昭和63年度から加わったことと、国民人口比を考慮していることによる。

最近の傾向としては、日本国内の地方公共団体職員、国際交流団体職員、民間企業社員の日本人短期研修依頼が増加している。現在三重県庁職員、名古屋国際センター職員等を数名受け入れている。

##### 出身分野別の参加者構成

専門分野別にみると、大学教官、弁護士、判事、医師、警察官、研究者、自営業もおり、異色なものとしては天文学者もいた(Table 2)。

#### 5. IATSSフォーラムの研修とプログラム

プログラムコースは約3ヶ月間、年3回実施される。参加者は全員IATSSフォーラムの宿泊施設に滞在する。旅費、食費等一切の費用はIATSSフォーラムが負担し、それ以外に、毎日の支出に2,100円を支給している。

1グループは18~20名からなる。当初は立ち上がり時の混乱と、予想される異文化間、国家間、宗教間のトラブルを避けるために各国別に招聘していたが、その間の受け入れ側の経験の蓄積と、昭和63年に初めて試みられたマレーシアとシンガポールの同時招聘が極めて成功裡に終了したことから、来年度からは、年3回開催されるコースの1回は、新たな参加国フィリピンを含め、5ヶ国から各々計20名を

Table 1 IATSSフォーラムの国・性別参加者数(第1~12回)

国名	男性	女性	計
インドネシア	51名	20名	71名
タイ	30	44	74
マレーシア	39	16	55
シンガポール	3	2	5
(日本)	5	1	6
(フランス)	2	0	2
合計	130	83	213

Table 2 参加者の所属分野構成

所属分野	人数
官庁	81名*
大学（教官・事務官等）	69
民間企業	39
医師	1
教師（大学以外）	4
国立研究所	4
国営企業	7
合計	205

注）\*は東南アジア参加者のみ。タイの場合、公務員の医師教師は官庁。

招聘することになった。これにより更に新しい展開が期待される。

IATSSフォーラムが昭和60年9月に開講以来、ほぼ4年が経過したが、その間プログラムは、次第に多様化し、濃密化していった。特にクラス講義、研修旅行、グループ研究以外の、鈴鹿市を中心とする中部圏の諸団体及び住民との交流活動の占める比重が著しく増加したのが特徴である。参加者の自国でのライフスタイルやIATSSフォーラムでの健康状態、心理的な反応を観察しながら活動の総量を検討しているが、ほぼ量的最大限に達したようで、現在はより高いレベルの内容を目指しつつ選択と質向上を進めている。

### オリエンテーション

国際交通安全学会のIATSSフォーラム関係者、及び鈴鹿市のある三重県下の関係諸団体を招待しての開講式が終わると、日本語講座と共に、すぐ約1週間にわたるオリエンテーションが始まる。これから3ヶ月間住む鈴鹿市の見学、その中には、バスの乗り方、駅での切符の買い方、スーパーマーケットでの買い物の仕方 etc. があり、さらに日常の交通手段となる自転車の乗り方は、近くの交通安全センターで、交通法規と共にみっちり勉強する。火災訓練もある。ホームステイでお世話になる家族との交歓パーティもある。

プログラムオリエンテーション、生活オリエンテーションも時間をかけて行われる。言葉もよく通じない異文化圏内で、しかも同国人といっても数日前までは全く面識がなかったものが3ヶ月間、同じ屋根の下で生活するわけであるから、決して快適な事の連続ではあり得ない。

そのような中で、IATSSフォーラムでの3ヶ月間を有意義にすごし、しかも多くの日本人との友好を維持するためには、適切な生活オリエンテーションにより心理的準備をさせ、リラックスさせることが

必要である。試行錯誤の結果、オリエンテーションの方法はいろいろ改善されトラブルも当初に比べ激減している。

### クラス講義

IATSSフォーラムカリキュラムの中核になるのがこのクラス講義である。期間中約26の講義があり、それらは日本の教育、産業、技術、外交関係、農業、社会問題、福祉厚生、国土総合開発、地域計画と多岐にわたる。勿論、国際交通安全学会の専門分野である都市交通、警察行政のしくみについても優れた講義討論が展開する。

講師は国際交通安全学会の会員を含め、大学教授、ジャーナリスト、政府官僚、民間実業家が当る。時には通訳を付けて、全ての講義は英語で行われる。朝9時から始まり、休憩、昼食をはさみ3時頃講座は終了する。

しかし、IATSSフォーラムの目指す所は日本の各分野での実情を個別に理解してもらうことに留まらず、日本の社会の各分野がどのように相互関連して、お互いの、そして全体の発展にどう寄与しているかを見てもらうことである。

過去に一部の参加者にこの意義が理解されず、『技術者の私が何故日本の農業問題を勉強しなければならないのだ?』というような苦情も出たが、最近の参加者はこの主旨をよく理解してくれているようだ。

もう一つの問題は、講座が日本の実情の説明に片寄りがちだというのがある。現在は、参加者に講座の一部で講座テーマに関する自国の現状を紹介してもらい、つまり、講座が教育に関するものであれば、自国の教育の現状を参加者に話させることによって、相互比較研究を容易にし、学習の効果を向上させ、一層の理解を深めさせている。これは成功している。

### グループ研究調査

1988年10月の第10回IATSSフォーラムから始まった、新しいプログラムである。

参加者は5～6名単位で3～4グループに分かれ、各々テーマを決め3ヶ月にわたって、独自の調査研究を実施する。

今まで取り上げられたテーマには、いくつか例を上げると、『鈴鹿市における住宅開発の現況』、『日本におけるマスメディアの世論形成における役割』、『中小企業における雇用の実態と社内教育』、『高等学校教育での人格形成教育』等、興味深いものが多々ある。

この種の調査では、特に外国人によるものはやや

もすると既に文書化された既存の意見・情報等の収集とその貼り合わせになりがちであるが、IATSSフォーラムで行う研究調査での情報収集は、直接面接、訪問、アンケートと、全て自らの足で集めた情報のみである。

3ヶ月という時間の制限、言語の障害、特に専門分野に入れば入るほど、英文資料の欠如など、外国人が日本でフィールドワークを実施する難しさは多々ある。にもかかわらず、日本人アドバイザーのサポートを得ながら成し遂げる成果は大きい。

この研究調査を通じて、外国人には入りにくい“閉鎖的”日本社会への“没入”が出来ることにも大きな意義がある。

この研究調査実施に当って、飯久保講師（デジジョンシステム社社長）によるEM法、及び鈴木講師（千葉大学文学部教授）によるKJ法が研究調査の方法論として活用される。

研究調査結果は論文化され、最終発表会で発表される。（注：この論文の後に、IATSSフォーラムの参加者の論文が紹介されているが、これはグループ研究がプログラムに導入される前の、個人論文である。）

#### 研究視察旅行と企業体験実習

クラス講義との関連のもとに、約1週間の東京視察旅行と、同じく約1週間の関西旅行に行く。東京では議事堂、放送局、新聞社、築地魚市場、大学その他、関西旅行では京都、奈良、大阪さらに広島まで足を延ばし、クラス講義の理解を深めている。それ以外にも1泊旅行を含め、いくつかの企業訪問、産業地等の見学が用意されている。

日本の近代化で重要なファクターを占めている教育については、幼稚園、小学校、中学校、高等学校、専門学校は必ず訪問する。参加者が直接教壇に立って、英語の授業をするのが通例である。そこで参加者が何を学んだかは別としても、生徒児童達の暖かい歓迎には、参加者一同胸を熱くしている。特に同年位の我が子を国に残して日本にきている参加者は、我が子を思い、目頭を押えているものすらいる。

期間中、一日は大企業または中小企業の従業員と一緒にコンペアーラインで日式労働を経験してみる。男女共、制服、安全帽、安全靴を身につけ作業を実際にするのである。規律と効率を重んじ、彼らからすると『厳しすぎる』労働を経験してみる。日式労働についてはいろいろな解釈があり、必ずしも好意的なものだけではない。しかしこの体験を通

じて、第三者から聞いたり、本で読んだ間接的知識でなく、少なくとも『事実』を体験するのである。

#### 日本語会話学習と日本文化学習

日本語学習については常に議論的である。講義もIATSSフォーラム内での言語が英語なのに、何故日本語を学ぶのか？ たかだか3ヶ月の滞在で日本語をマスターできるわけがないではないか？ 等々である。事実、当初は期間中計25時間あった授業を18時間に短縮した。しかし、日常の買い物、ホームステイ等で威力は絶大であり、高校まで6年間ならった我々の英語より3ヶ月間18時間かけた彼らの日本語のほうがはるかにレベルが高い。

帰国後も日本語を引き続き学習するものも多く、再度日本に戻り、大学で勉学を続けているものも五指を数える。

その他希望に応じて茶道、華道、その他の文化講座も開かれ、喜ばれている。

#### 6. 課外交流活動

ここ2～3年とみに充実してきた部門であり、その重要性の認識も深まっている。次のようなものがある。

##### ホームステイ・ホームビジット

週末、近在の家庭を訪問または宿泊する。農家、サラリーマン、教師、商店、医師、様々な家庭がある。この訪問を通じて、日本人の家族の間関係、建物と風土の微妙な関係などを知るのである。これを通じて知り合った多くの日本人が、参加者の結婚式やその他のお祝いに、マレーシアに、インドネシアに、タイに招かれ、旧交を温めている。ホームビジットをお受けいただく家庭はコンピュータで登録され、趣味、職業別に訪問をお願いしている。現在は鈴鹿市のみならず、中部圏一円に広がっている。

##### 参加者国紹介デイ

多くの日本人が、東南アジアを仕事で、観光で訪問しているにもかかわらず、その国の日常生活、社会問題等を知らない。そこで多くの日本人を招いて、参加者が自国の全てを語る会である。人種、社会、産業問題等観光旅行ではうかがい知れない諸問題がスライド、ビデオを使って語られる。後半は古典舞踊、古典楽器の演奏があり、楽しい交歓が広がる（Fig. 4）。前回のタイ参加者のときは、日本人の参加希望者が多く、IATSSフォーラムのホールではもはや手狭になり、新設の鈴鹿市文化会館で実施、500名近くの熱心な参加者が集まった。



Fig. 4 交歓会の風景

### IATSSフォーラム・シンポジウム

これもIATSSフォーラム参加者と、日本人参加者合同のシンポジウムで、生活に密着した共通の問題、例えば、子育てのこと、教育のこと、親子関係など、日常の共通関心事を話し合う。熱心な討議が展開される。日本人参加者はサラリーマン、公務員、教師、家庭の主婦等で、まさに草の根シンポジウムである。

### 東南アジア語講習会、英語会話学習会、

### 民族料理講習会

全て参加者が先生となって、家庭の主婦を中心とする生徒に指導する。70才の老婦人が英語を習っている。欧米人とは別な親近感があるらしい。

民族料理講習会は、30名定員に対して100名以上も集まり、一時中止した。最近、形式を変えて再開された。

最近の傾向として著しいのは、参加者が、地域の諸団体、つまり、PTA、教師の会、YMCA、ロータリークラブ、ライオンズクラブ、JC等で自国の文化、社会について講演したり、座談会に出席するケースが激増していることである。

四日市のYMCAで、参加者の一人であるタイ・チェンマイ大学助教授のコスム・サイチャンさんの『チェンマイ地方の結婚の形態と慣習』は多くのスライドを使って、興味深く、聴衆に大きな感動を与えた。シンガポールの英国系会計事務所で働いているフォン・フォンさんは、地元の実業家の会合で、『シンガポールの経済復興』と題して講演をした。必ずしも専門家でない25才の若い女性の自国の経済事情への造詣の深さに、聴衆は深い感銘を受けたのである。

このような依頼が増え、事務局としては手配に戸惑いながらも、喜ばしい展開だと受け止めている。

### 7. おわりに

近年、日本の個別の分野についての研究はめざましい。特に日本の経済と工業の著しい発展は、諸外国の注目を集め、出来得るならばそこからヒントを学び取り、自国の発展に役立てたいとの熱いまなざしが向けられている。

にもかかわらず日本及び日本人の行動、考え方は、相変わらず西欧諸国のみならず開発途上国にとって理解しがたい不可解なエニグマ的存在のようである。そしてそれが経済を中心として多くの誤解と摩擦の原因になっているといつてよい。

思うにこれは、表面上の国際間諸問題に対する日本の諸反応を、彼ら自身の社会文化的枠内で解釈しようとしているからである。日本の国家的性格形成の基盤となった文化、伝統、地理、気候、歴史から有機的な存在としての日本・日本人を解釈していないからだと言えよう。

但し、全く同じことがむしろ日本側についても言えるのであって、ことは日本側のほうが深刻なのかもしれない。

この両側の問題解決にあえて挑戦したのがIATSSフォーラム事業だとも言える。

さて、参加者はいかなれば未開地に没入してその“未開社会”を解釈し、理論化しようとする文化人類学者である。大変なフィールドワークである。

各々専門家である参加者が、包括的な汎専門領域を研究する、言い換えれば“行間”を読むことの意義とその研究の仕組みが理論化され、体系化されているかということ、それはまだ程遠い状態である。

今後多くの方々のご意見を取り入れて、完成していきたい。ただしあまり完成してしまうと、“未開地”でなくなり、フィールドワーク的興味が減じてしまうであろう。

IATSSフォーラムは、日本の国際化のためのみならず、地域の国際化にも大きな貢献をしている。さらに未来に向かって無限の可能性を秘めている。三重県の片隅で、今後もパイオニア的仕事を続けていきたい。